

# 家族のかかわりの一考察(3) - 表現と受容を通して思春期を考える -

## お茶の水女大 中村洋子

目的：日常生活の中で、思春期の子供の自己形成の過程を取り上げ、“表現すること”に着目し、それに対応する家族とのやりとり(“受容する”かかわり方等)によって相互に形成される思春期の親子の人間関係の展開状況を基に共に変わる家族の状況について考究する。

方法：参加観察法・心理劇法・質問紙法・フィールドワークを組み合わせて活用する。今回は主としてフィールドワークと具体性・仮設性の心理劇を活用する。結果を分析・考察するにあたっては、関係学(創始者 松村康平)の立場から かかわり分析を行う。①思春期の子供が自己をいかに表現するかについて、具体性(アルバイトと高校生)・仮説性(“けんか”と“けが”)の心理劇を行演し、分析する。②インタビュー・質問紙等によるフィールドワークから家族と思春期の子の関係状況を分析し、思春期の親子の関係の特色を考える。また表現した子への対応のしかたについて関係構造を考える。③親子共に変わる過程を分析考察する。

結果：1.学童期と異なる思春期の自己表現として、自己主張・自己防衛・客観的視点の3点のを取り上げ、表現することでかかわり方を学ぶこと。2.そこに起こる親子間の“ずれ”と“一致”・勾配関係等により、思春期独自の家族関係が生ずること。3.家族とのやりとりは、異なる立場の人と どうかかわるか考える場であり、思春期の子と親が共に学び変化することが明らかになった。